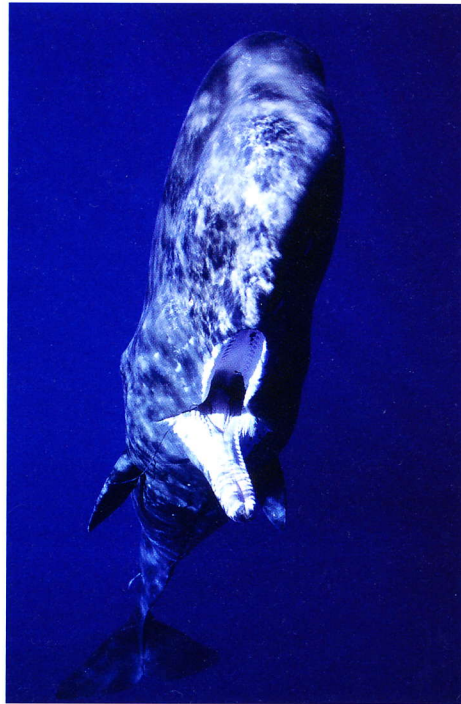


特殊撮影見聞録 久門易

第54回

誰一人見たことがないクジラの生態を、
誰よりも美しく撮影する方法とは?!



左上：母子のザトウクジラ（撮影地・トンガ）2012年8月撮影。
左下：群れのザトウクジラ（撮影地・トンガ）2012年8月撮影。

海の中にはまだ「前人未到」の世界がある

川崎・武蔵溝ノ口駅前にある水中写真機材専門店「アクアフォーラム」には、世界中からプロ・アマ問わず問い合わせが入るといふ。代表の永松さん自身もダイビング歴40年を越す専門家である。2013年4月、世界を駆けめぐってクジラの生態写真を撮影しているトニー・ウーさんが帰国して、アクアフォーラムに寄るといふので話を聞きに行った。

国籍はアメリカ。幼少から、アジアやアメリカなど20ヵ国で生活してきた経歴があるトニーさん。ブラウン大学と慶応大学に学び、日本で会社員として働いていたこともあるという46歳だ。

「もともと水中写真は趣味でした。2000年頃、小笠原でマッコウクジラの撮影に成功し、その写真がマリンドイビング誌のコンテストで優勝しました。これがきっかけで世界中に名が知られ始めました。

体長10メートルもあるマッコウクジラが口を大きく開

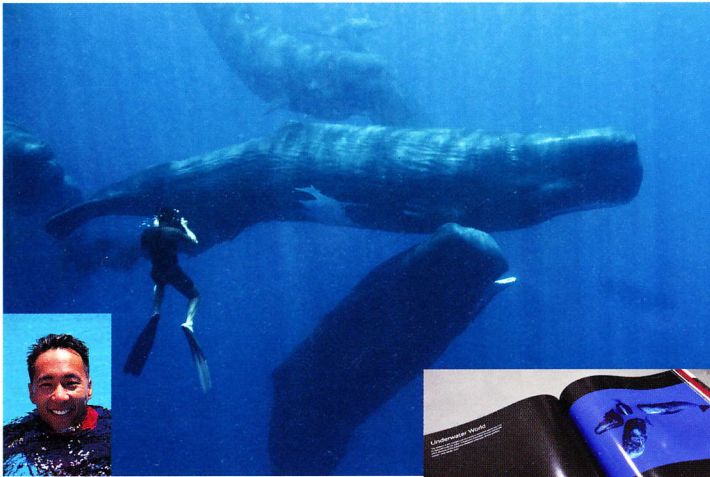
け、喉の奥まで覗ける写真は、世界中の水中写真家の度肝を抜いた（右頁右写真：2001年Antibes Festival Mondial De L'Image Sous-Marine 賞受賞）。

「意外なことにクジラの生態はあまり知られていません。捕鯨では生態を知ることとはできませんし、科学者の多くは死んだクジラの解剖と論文や記録を調べるのがほとんどです。生きているクジラを水中で見るとは、世界中でも限られた人しかできない体験なのです」。

トニーさんの写真の数々は水面近くで撮影されている。ダイビングの経験のある人なら誰でも、運さえよければ撮影できてしまうかのような錯覚を覚える。しかし…。

「クジラが水面近くにいるのは、息継ぎをしたり、交尾したり、糞をしたりする時だけです。深く潜ってしまうと、どこにいるのかわかりません。そしてこの広い海のどこにでてるのか？ それを予見できる人もいません」。

さらにフィッシュアイレンズを使いクジラまで数メートルまで近寄ることができなければ、トニーさんが撮影したような写真は撮ることはできない。



撮影の様子。かなり接近して撮影しているのがわかる。「Wildlife」に掲載された4頭のクジラを撮影した作品「The big Four」。トニー・ウーさんは、タンク（ボンベ）を使わないスキンドビングですべて撮影しているというから驚きだ。



フルサイズ一眼レフ用の水中ハウジング。レンズ前方のドームは、魚眼レンズ対応で「アクアフォーラム」オリジナル製品。水中マスクをつけた状態で覗くため、下写真のような特殊なビューファインダーをつけている。



ローライ二眼レフカメラ用の水中ハウジング。純正品らしいが世界的にも珍しい機材。アクアフォーラムの店内は、こうした機材がたくさん並べられている。写真右：取材時のトニーさん(左)、アクアフォーラム代表の永松さん(右)。



アクアフォーラム
 〒213-0011 神奈川県川崎市高津区久本1-2-2
 スキップビル5F Tel.044-877-8879
<http://www.jpce.co.jp/>
 自社開発・製造する水中写真撮影機材専門店として世界的に知られる。歴代の水中ハウジングなども展示しており、博物館のようでもある。
トニー・ウー
 (TONY WU) <http://www.tonywublog.com/>

Photo Naturalist (フォトナチュラリスト) を目指して

「きれいなだけの写真には関心がありません。確かな科学的意味があって、誰も見たことがない瞬間を、誰よりも美しく写したいのです。Photo Naturalistは私の造語ですが、このような存在を目指しています。」

クジラに出会うため外洋へ出て撮影を行なうには費用もかかるが、特定のスポンサーやクライアントをつけることはしない。

「船のチャーターから、全てを一人で行なっています。現在では世界各地の撮影場所や地元の方々、クジラの研究者とのつながりもできました。永松さんのように撮影機材や技術のサポートをしてくださる方も大切です。」

水中ハウジングで使用する広角レンズの防水部分は「ドームポート」と呼ばれ、描写性能を重視するため、透過率の高い硝材を使って研磨することで最適なドーム形状に作られる。さらに内部へマルチコーティングを施すなど、高画素デジタルカメラでも高い描写が得られるよ

うに改良。この機材は、永松さんのアイデアによるものだ。

「クジラを高画質で撮影するには水面近くの自然光で、できるだけ近寄るのが理想です。あの巨体に数メートルまで近寄るのはかなり恐怖を感じます。これまでに得られた経験と知識によって、どのようにアプローチするかを決め、クジラを見つけ、追いかけたり、潜ったり。酸素タンクを背負って自由には動けませんから、スキンドビングです。そのほうがクジラも、こちらを観察して信頼してくれるようです。」

実は見せてもらったクジラの写真は、全てスキンドビングで撮影したと聞いて腰が抜けそうになった。

「日々のトレーニングは欠かしません。クジラについての知識を深める勉強も楽しいから続けられるのです。」

トニーさんの写真が「世界で唯一の写真」として評価されるワケが少しわかったような気がする。

くもん やすし/ソニー-NEX + 安原製作所 MADOKA 専用の VR パノラマアダプターを作り自分のサイトで販売したところ、予定数の30個が1ヵ月で売り切れに。気をよくして、増産計画中。